

## 岡本かの子の文学と〈京都〉

——旅の所産と古典受容から——

### 一、はじめに

岡本かの子の親しんだ土地といえ、何より生涯の生活圏となつた東京と神奈川が挙げられる。生まれたのは別邸のあつた東京都港区だが、幼少期を過ごしたのは、川崎市高津区二子の、多摩川べりの大貫家（実家）である。東京の跡見女学校に学び、岡本一平との結婚後は歿年まで都内（当時の京橋・赤坂・芝区。大正十五年から赤坂区青山）に居住した。

では旅行先はどうであらうか。冬樹社とちくま文庫版全集の年譜には、各々の土地との関わりが、おおむね以下のように記載されている。

明治四十二年、二十歳の春頃、伏屋武竜と千葉県飯岡町へ駆け落ちをする。同年夏に長野県追分、杓掛に避暑。

### 外 村 彰

大正三年、二十五歳の夏に福島県飯坂温泉で愛人・堀切茂雄の弟妹と過ごす。同六年六月、一平と神奈川県湯河原にて湯治。八年夏、一家で静岡県伊東温泉に逗留。十年から鎌倉建長寺にて参禅。十二年、三十四歳の夏、鎌倉に滞在中芥川龍之介を知る。九月の関東大震災後、同居していた恒松安夫の実家があつた島根県へ避難し、玉造温泉に滞留。十四年、北海道の岩見沢病院に左遷された愛人・新田亀三と会うため二、三度当地を訪問。

昭和二年二月に熱海の梅林を観賞。同四年、四十歳で広島県の宮島、伊勢神宮を一家で参拝し、十二月から家族で欧米旅行に出立。シンガポールやスリランカ、エジプトを経て翌月ナポリ到着。以後はパリとベルリンを根拠地としてフランス、イギリス、アイルランド、ドイツ、オーストリア、イタリアを巡

る。七年に太郎をバリに残し、米国經由で三月に帰国する。

同じ七年の六月に、ラジオ放送のため大阪に滞在。九年、仏教講演のため金沢、静岡、会津方面へ。十年、他の文学者たちと中禅寺湖に投宿した。十一年四月、夫と九州佐賀、佐世保旅行。六月まで別府温泉に滞在。十二年三月、京都旅行。十一月、東海道旅行。十三年、四十九歳の早春に滋賀県の石山寺を参拝する。九月、軽井沢に川端康成を訪ねる。年末と翌十四年の新年は神奈川県三浦で過ごした。

右に記したように、生涯最大の旅行は二年四ヶ月にわたった欧米旅行だが、これを例外とすれば、国内の土地では関東甲信圏に親しんだのが知られる。アンケート「避暑地推薦」『文芸春秋』昭七・七)にも「軽井沢とか箱根とか逗子鎌倉あたりで結構だと思ひます」との回答があり、毎夏のように彼地で行樂をしていたと考えられる。

それらの地域を除くと、北海道、福島、静岡、愛知、石川、三重、滋賀、京都、大阪、広島、島根、大分、佐賀、長崎などに、かの子は足を延ばしたようである。たとえば「春の温泉」(『アサヒカメラ』昭十三・四・五)には玉造温泉の、「別府日記の一節」(『短歌研究』昭十三・八)には別府温泉の回想が記されている。ただしどちらも一ヶ月程の滞在であつたらしい。なお、年譜には載っていないが、ほかに青森、岩手、宮城や新

潟、奈良、兵庫、岡山などの県にも滞在したようである。

さて、岡本かの子は昭和十二年の三月に京都を訪れたが、何度か同地を旅していたとみられる(後述)。拙稿では、それらの事実を考証しながら、日本の文化の集積地として、国民の憧憬の対象となってきた古都・〈京都〉とかの子文学との関わりについて考えてみたい。次節からは直接体験としての〈京都〉旅行、古典等の読書による得た間接的な〈京都〉像から生まれた作品の特徴につき論及し、ひいてはかの子文学が〈京都〉をどう描き、同地から何を得たかを考察してゆくつもりでいる。

## 二、短歌と随筆にみる〈京都〉

まずは短歌からみてゆこう。『浴身』(越山堂、大十四・五)の「ながやみ」連作の一首には、

薬呑む器となりて清水焼京のみやげもひさしくなりぬ

という歌がある。「清水焼」が他者から貰ったものか、自分「みやげ」として持ち帰ったものか判然とはしないが、〈京都〉との所縁を伝える、ごく初期の作品である。初出未詳歌ながら、前後の初出誌が大正八〜十一年だったため、おそらく大正七年以前に京都まで旅行をしていたのではないかと推量される。ちなみに岡本一平が「琵琶湖めぐり」(『東京朝日新聞』大

七・六・二十五・七・十二」を発表したことから、彼が大正七年六月頃に滋賀県を訪れていたのが知られる。「琵琶湖めぐり」では三井寺近くの「両願寺」で「源兵衛の鬨」を拝観したと記してあるが、この「源兵衛の鬨」から想を得たかの子の戯曲が「取り返し物語」(『大法輪』昭九・十一)であった。その「前がき」には「いつぞやだいたい前に、比叡の山登りして阪本へ下り、琵琶湖の岸を彼方此方見めぐ」ったとあることから、この大正七年六月に、夫と同道して滋賀県を訪れた可能性は否定できないと思われる。

かの子は「比叡の山登りして阪本へ下り」と記しているが、阪本は延暦寺の天津側の門前町を指す。あるいは、先に京都(西坂本)側から比叡山に登る前に、かの「清水焼」を京都市内で購入したのかもしれない。

大正期の〈京都〉をかの子が何時ごろ旅行していたかについては、それを立証できるほどの文献が見当たらないため、時日を断定するのが難しい。とはいえ、たとえば「大阪の婦人を語る東京婦人の座談会」(『主婦の友』昭四・三)でかの子は「先年(四年ほど前)私が大阪へ行つた」と話しており、大正十四年頃に関西へ旅していた事実が分かる。とすると、この大阪旅行の後先に〈京都〉を訪れていた可能性も、否定しきれないであろう。

とまれかの子は、「家族づれで行ける日本新八景の選定懇談会」(『婦女界』昭二・八)の席上で、九条武子や田山花袋の意見を受けて「京都といふ所は、すべてに懐しみが多い様に思ひますね」と同意を表していた(「新日本八景」に推奨したのは、震災後に訪れた鳥取県米子の「弓ヶ浜」)。すでに〈京都〉に幾度か旅行をしていた故の意見と思われるが、「すべてに懐しみが多い」という発言には、歴史や古典の舞台となった日本文化の集積地〈京都〉に、日本人が普遍的に抱く親しみや憧憬にも通ずる趣旨があるようだ。

『浴身』の次に刊行された『わが最終歌集』(改造社、昭四・十二)収載の連作「関西へ夏期の旅」(全四一首)には、左記する「京都市に行く」七首も収められてある。

加茂川の夏の真昼にうちそよぐ河原の草をやさしとは見る  
東山はあれぞとわれにをしへつつ京女童の眸すゞしけれ  
南座は夏の普請に新らしき薬ござかむりすがすがしけれ  
夏の日の四條大橋白犬を女連れつつ行くがひそけき

京に来て真昼間ねむきわが眸に八坂神社の朱の神垣  
銀閣寺のみ庭に敷ける白妙の砂を淨けむわが歩みかも

国つたからこの銀閣のいただきに夏寒き風わが浴みにつつ  
これらの初出は未詳だが、第六首が『禅の生活』(昭四・九)に「選者詠」として掲載されていたため、昭和四年夏の旅行の

折に詠まれたものと推される。鴨川や南座など四条河原町界限から八坂神社、さらに北上して銀閣寺を参拝していたことが知られるが、全体に視覚のイメージの勝った、平明な声調の作が多い。第二首などは、清新な映像の一場面を想起させる佳作である。

「関西へ夏期の旅」には「京都市に行く」に続いて次の「比叡山」三首も掲載されている。

古を竝に寄りけんみ聖の尊さ今もわれにせまり来

古やをみな子の身のたやすくは登りし山にあらぬかしこ

さ

かごかきがわれに吞まする深山路の比叡の霊水咽喉には沁

む

延暦寺の伽藍はほとんどが滋賀県大津市に属しているが、京都市側の「雲母坂」などから登った際の作と考えれば〈京都〉での歌になる。いずれにせよ「京都市に行く」よりも感動が体感となって伝わる歌々である。「み聖」には親鸞など多くの宗祖が想起されていようし、「かしこさ」には霊山への畏敬の念が、「咽喉には沁む」からは冷たい「霊水」をありがたく飲みほす、それぞれの詠み手の様子が自ずと映じてくる。

以上は昭和四年の夏（七月頃か）に〈京都〉へ旅した際の文学的所産である。かの子が〈京都〉を題材とした短歌は、管見

では他にみあたらない。

# \*

次に、〈京都〉をめぐる随筆にふれておきたい。かの子は二種の〈京都〉紀行を書いた。一つは「晩秋の嵯峨野」〔『雄弁』昭和十・十一〕である。そこには、「昨年の十一月」に「京都で二日間の講演の隙を利用して嵯峨野を訪れ」たと記述されている。「以前に三度、京都へ行つたことがあつた」が、嵯峨野は初めてだったともいう。

このように昭和九年十一月に、かの子は四度目の〈京都〉行を経験していた。では過去三度の〈京都〉行はいつなのだろうか。候補としては、前述した大正七年六月、大正十四年頃、それに「関西へ夏期の旅」の昭和四年夏あたりか。ほかに欧米から帰国後、昭和七年六月にラジオ放送のため大阪に出向いた（年譜にも記述）折に、〈京都〉にも寄っていた可能性があるだろう。

さて「晩秋の嵯峨野」には、車で嵯峨野から嵐山に至り、しばらく亀山公園付近を散策して深秋の紅葉を賞美した様子が、こう記されていた。

道の両側の乾草が、関東で見られぬ明るい紅色に輝いてゐるのが非常に眼に温かい親しみを与へ、心が自然と和んで来るのであつた。（中略）渡月橋が視野に現はれると、も

う私は詩情に酔はされて他愛もなく感嘆の言葉を言ひ続けた。(中略) 鮮やかで落付いた境地だ。私は川の景色に見惚れて、向ふ岸の上に聳える山容に気付かずにあつた。

(中略) 時雨に濡れて色艶を増した嵐山の紅葉は、全山に互つて緑の常磐樹の間に濃淡とり／＼の紅さを浮き出させて、宛かも万華の一大堆積のやうに豪奢を極めてゐる。

(中略) 俯しては水景を覗き、仰いでは嵐山を眺め、私が常に好む艶やかで寂しく落付いた新古典美を此処で満喫したのであつた。

嵐山と大堰川を取り入れた嵯峨野一体の景勝は、恐らく今後何百年、何千年と経つても、その時代時代の人々に常に新古典的美感を与へて永久に愛賞されるであらう。(中略) 嵯峨野は花の巴里にも勝る程、洗練され品格と野趣の調つた新古典美を持つてゐる。

乾草への「温かい親しみ」に和み、有名な渡月橋に「感嘆の言葉」を発し続け、「豪奢を極め」た紅葉の美に「艶やかで寂しく落付いた新古典美」を感じとつて、その景色に満足している。ただ、こうした嵯峨野の「洗練され」た野趣なり詩情が、今後も「永久に愛賞」されてゆくためには、「巴里」が古い街並を保存するのと同様、長期的な維持管理を必要とする。

たとえば、渡月橋が鉄橋になったり川岸がコンクリートで固

められていたとすれば、嵐山からかの子が「新古典的美感」を感受できたか疑問である。近代化によって昔日の景勝地の情趣がそこなわれないようにするには、人為による適切な管理が必要となるのだ。

たとえば庭園は、自然の風景を人間の好みの形へと構成し直して造成する。それはある種の自然の文化化・人間化である。歌枕など歴史の記憶を刻した景色も、人為的に保全されることで「古典的美感」が守られる訳である。このように〈京都〉の「古典的」な「美感」は、人間の手による管理・保全があつて始めて維持されるといい得る。

もう一つの〈京都〉紀行に眼を転じよう。それは、年譜の記述の根拠にもなった随想「京の春雨」(『読売新聞』昭十二・三・十二)であつた。そこには、このように書いてある。

私たちのやうな都会に育つたものが、あまり純粋な自然に直面する時は何か寂寥な感じに撃たれて必死に物を考へる。自然の慰めにはならない。そこで、たまに寛ぐには、どうしても自然と人間生活とが程よく交響してゐる都市といふことになる。さういふ都市は日本中に幾つもあつたが、京都は誰しも見逃さぬところであらう。

「あまり純粋な自然」とは、人間の生活圏から離れた、非人間的な空間を指すと思われる。周囲をなだらかな山々に囲ま

れ、鴨川、桂川の流れる古の都は、たしかに「自然と人間生活とが程よく交響」している場所だ。〈京都〉は自然が人間により馴化され、文化化された都市空間の代表格だと、かの子もいう。

かの子は「京の春雨」のなかでこう書いてもいた。

私は京都へ出かけた。一日目は招かれた仕事を果し、二日目一日だけで、二年振りのこの都に親しまうといふ忙しい旅である。けれども、晩秋と春先きのこの都の光線と空気の美に私は嘗てより憑かれてゐる。都合を無理しても、あくがれて出向いた。

「二年振り」とあるのは、昭和九年十一月以来ということの意味するのだろう。「この都の光線と空気の美」は、早春と晩秋こそ際立つ。そうかの子は感じ、古都の季節的な魅力に「あくがれ」るほどの魅力を感じていたようなのである。

こうしてみてきたように、かの子は大正七年六月、昭和四年夏、九年十一月、十二年三月に〈京都〉を旅行していた。大正十四年と昭和七年六月の大阪行の前後に、一度は〈京都〉に立寄ったとすれば、計五回になる。これは関東甲信地域を除けば、比較的多い訪問回数だろう。そうして、やはりかの子は一般的な日本の国民と同じように、古都〈京都〉に親しみ、その美のイメージに憧憬の念を抱き、人工的に保全されてきた「新

古典的美感」を愛したといっている。

ちなみに、かの子の随筆には、日本古典をテーマとするものが目立つ。たとえば晩年の「桐の花盛り」（『国文学解釈と鑑賞』昭十一・九）には「更科日記」「十六夜日記」「取りかへばや物語」が、「京都と江戸の歌人」（『短歌研究』昭十三・六）には小沢蘆庵と上田秋成、香川景樹といった京都在住の「歌人」が取り上げられていた。それらは自ずと舞台の〈京都〉にもふれている訳である。

ほかに「方丈記」（『読売新聞』昭十一・七・十一）、「現代より見た紫女と清女（ラジオ放送）」（初出未詳『希望草紙』人文書院、昭十三・六〔昭十二・六執筆〕）、「菅原孝標女を語る」（『むらさき』昭十二・九）、「松風の尼―蓮月尼の歌―」（『むらさき』昭十三・五）、「清少納言」（『日本文学』昭十三・九）は〈京都〉に関わった文学談義でもある。「季節の文学」（初出未詳、前掲『希望草紙』〔昭十二・十一執筆〕）にも「源氏物語」「枕草子」への言及があった。なお滋賀県ながら〈京都〉に縁の深い石山寺への参詣は、「蓮如上人を語る」（『大阪朝日新聞』昭十・二・三）、「早春」（初出未詳『池に向ひて』古今書院、昭十五・十一）に述べられてあった。

これらの記述によって、かの子が早くから古典に親しむことによって、その主な舞台である〈京都〉に親炙してきたことが

知られるのである。実地に〈京都〉を見聞したのは五回程であつたが、読書という間接的、空想的な〈京都〉体験は、幾度も繰返されたはずだ。つまりかの子にとっての〈京都〉は、少女期からの読書を通じて、幾度も間接的に訪れてきた、国内でも相当に親しく近い場所として意識されていたと考えられるのである。

### 三、小説と戯曲に描かれた〈京都〉

かの子の古典を通しての〈京都〉受容は、小説や戯曲の創作にも結実している。かつて野田直恵は、〈京都〉を「地理的素材」とするかの子の作品を三作とした。<sup>(3)</sup>それらは「鯉魚」(『禅の生活』昭十・七、八)、「上田秋成の晩年」(『文学界』昭十・八)、また戯曲「或る秋の紫式部」(『むらさき』昭十・十二)を指すのであろう。原典との比較は割愛するが、それぞれ、上田秋成『雨月物語』の「夢応の鯉魚」、同じく上田『肝大小心録』、そうして『紫式部日記』に依拠して書かれた作とされている。

「鯉魚」は応仁の乱も末となった室町時代の話で、嵐山の渡月橋の東にある「臨川寺」が主な舞台である。橋の架かる大堰川おおいの魚に毎日餌を与える役目にあたっていた昭青年が、偶然出

会った早百合姫を助け、かくまっていたのを見付けた僧たちから非難されるが、住持・三要の提案の通り法戦によって是非を決することになった。姫を守ろうとの勇氣から昭は覚悟して法戦(禪問答)に臨み、僧たちの問に対し「鯉魚」とのみ答えているうちに融通無碍の境涯に達する。つまりは「一匹の鯉魚にも天地の全理が含まれる」という「生命の遍満性、流通性を体証」して悟りを得るのである。姫は、のち「道に志ある身」となり優れた「白拍子」として生きた。このように、愛執を転じ一念に徹したことで、高い徳を得た若者が登場する法話のごとき小説なのだが、教理臭よりむしろ鯉と姫をめぐる幻想的な描写に魅力がある作品として読めるようである。

「上田秋成の晩年」は、天涯孤独の身となって南禅寺境内の小庵に住むようになった秋成の、老いてなお枯れない「妄執の念」を描く短篇であつた。煎茶道に「全身的」に打ち込み、これまでの人生、宣長など論敵や京都生まれの妻・お玉(瑚璉)など縁あつた人々を回顧する秋成に対し、作者が「その欲望や自省を読みとり得る対象として認識し、ある種の親近感をいだいていた」と嶋田彩司は指摘する。<sup>(4)</sup>「京は薄情な寒さ」と呟いたり、南禅寺の鐘が響く場面があつたとはいえ、内容は狷介孤高な秋成の迷える心の綾を、来し方の回想に織り交ぜて語るもので、〈京都〉を描く場面、筋としての面白味に物足りなさが

残る。

戯曲「或る秋の紫式部」は、前半「京の片ほとり」の父（不在）の邸宅に逗留をして執筆中の式部が、「源氏物語」を読んだ「妙な美男」の訪問を受け、後半になると彼女が、修行に熱心な「隣の庵室の聖」が解脱に至れぬのは「美しいものに牽かれる」心を持っているからだと言女の老婆に話す、という筋であった。仏縁に憧れる紫式部の心にも、美男や聖と同様「色香にひかれる気持ち」はある。そうした、人間らしい情感を大切にする式部の心のおきどころが作品の眼目になっている。

これら三作は発表時期から考えて、昭和九年十一月の〈京都〉旅行に触発され、執筆されたものではないかと考えられる。「鯉魚」は〈京都〉らしい戦乱の時代の僧院を描き、完成度も高いと思われるが、「上田秋成の晩年」「或る秋の紫式部」は、かの子としては習作の域に属する出来である。両作とも、上田秋成と紫式部にゆかりの地として〈京都〉を舞台とするが、風土的には大きな影響を及ぼしている訳ではなかった。

このほか、かの子の古典に依拠した作品をみると、掌篇集「新神秘主義」の一篇「奇蹟（『読売新聞』昭三・九・）は「丹波の国」が舞台であった。それから大田垣蓮月が登場する戯曲「ある日の蓮月尼」（『アカツキ』昭四・二・六）は、実際に蓮月が住んだ地から現在の京都市内での話と推察される。また短

篇「茶屋知らず物語」（『禅の生活』昭十・六）は祇園の遊里を二人の禅僧が訪ねる話であった。

「奇蹟好きの女」が「子供の無心の態」に感動して改心する「奇蹟」、蓮月が自分に迫る青年の愛欲を浄化しようとする「ある日の蓮月尼」、禅僧の朗誦する経文を聞いた「色里」の女性達が「しみじみした気持ち」となる「茶屋知らず物語」——三作には宗教的なテーマとして、人間がその執着心を離れることの肝要さが説かれている。

総じて、仏教的な色合いの濃い小説・戯曲ばかりだが、〈京都〉を舞台にしたかの子の作品には、愛欲など人間存在の執着の様に注視し、それらを清らかな心境に昇華させることを求める傾向が顕著に見受けられる。つまり宗教的な境涯を描く場所として〈京都〉がふさわしいとかの子は考えていたようなのである。

#### ＊

これらの作品群に対して、歿後に発表された現代小説「食魔」（『鮎』改造社、昭十六・三）は、かの子の〈京都〉関連作としては、いささか異色である。夫の岡本一平によれば、「書いたのは外遊直後」だが、原稿を持ち込んだ「ある綜合雑誌」から断られ「時々改増しつつあったもの」だったという<sup>(5)</sup>。主人公・鼈四郎のモデルは陶芸や書、料理など多芸の人として著名



な、かの北大路魯山人である。

魯山人は、上賀茂神社の社家に生まれ、両親と縁薄い少年時代を過し、独学で芸術に通じた。特筆すべきは明治三十八年頃から二年間、一平の父・岡本可亭（書家）の弟子として岡本家に同居していたことで、そうした「魯山人」と『食魔』との関連<sup>6</sup>を初めて指摘したのは勝又浩である。北大路魯山人に関わる情報は、古典受容によるものではなく、本人と面識のあった一平から供されたものと考えられる。

「食魔」は「一行空白が五箇所あることから、六章に分けることができる。そのうち鼈四郎の上京までの京都生活が描出されるのが、全体の半に近い分量を占める第四章であった。かの子の現代小説で〈京都〉が出て来る例は他にないようだが、加茂川から京極界限にかけての地域が、鼈四郎が成長し、料理人として腕を磨いてゆく具体的な舞台となっていた。以下に第四章の内容を紹介しておく。

鼈四郎は「京都の由緒ある大きな寺のひとり子に生れ幼くして父を失った」。「内縁の若い後妻」だった母と「高等小学」を卒業した頃から彼は「拓本職人の老人」の家に住み、「法帖造りの職人として仕込まれ」るべく育てられる。少年時には「糺の森」に近い、「鞍馬へ岐れ路の堤」辺りの加茂川で小魚をとって来て、煮魚にして母と食べたりすることもあった。

青年となった鼈四郎は、市内の趣味人から「風雅の薙の手伝ひ」を頼まれ始め、「才はじけた性質を人臆しする性質」ながら評判を呼び、千利休の幼名である「千の与四郎」という「戯名」で呼ばれるようになる。会席で「洒落たお弁当」を賞味したり、ある折には「智恩院聖護院」の鐘を聞き「東山三十六峯」を眺めたりもする、そんな心地よさにも惹かれて彼は諸方の家を「渡り歩る」くのであった。「琴棋書画」や生花、茶、表具、彫版、篆刻の技量に長けた「調法人」の彼はいつも歓迎された。そうして「師匠連」に連れて行かれる「瓢亭・俵や」等の美味に慣れてゆくうち「天栗から、料理の秘奥を感取つていったのである。

やがて鼈四郎は、世慣れして周囲に「威猛高」な態度をとり始めた。このことは自分が「才気とカンと苦勞」「眼学問、耳学問」で「世間のあらまし」の「結論」を得た人間であり、秩序立った学問を身につけていないというコンプレックスの裏返しによるものだった。皆から尊敬され、「先生」と呼ばれるほどの貫禄を求めたがった彼は、多くの知己を失う一方で何人かの、年上の「変りものの知遇者」を得たのであった。

その一人が「京極でモダンな洋食店」の「メーゾン檜垣」を経営する、「アメリカ帰りの料理人」檜垣だった。芸術を情熱的に愛し、油絵を趣味とした檜垣は、「無遠慮な談敵」となっ

た「東洋趣味」に通じた鼈四郎が気に入る。彼らは互いに「芸術至上主義」を談じては「天才」だと自ら恃む。檀垣は鼈四郎を「鴨川の夕涼みのゆ、か、から、宮川町辺の赤黒い行燈のかげに至るまで、上品や下品の遊びに連れて歩く」き、東洋芸術を主張していた鼈四郎も彼の影響で「モダン」な西洋美術の要諦を体得した。やがて「古都の風雅の社会」での鼈四郎の人氣は回復し「先生」とまで呼ばれるようになる。そんな折に、鼈四郎はある女性と知り合うのであった。

それはある「春の宵」のこと——「女流歌人で仏教家の夫人がこの古都のある宗派の女学校へ講演に頼まれて来た」歓迎会が、「檀垣の二階」で催された。「画家の良人」も一緒であったが、「童女のままで大きくなつたやうな容貌」とある辺りなど、やや手前味噌気味で興ざめながら、作者を彷彿とさせる。

鼈四郎は「芸術をやるものが宗教に捉はれるなんて」と反発し、「何やら苛め付け」たい気持ちになってこの夫人に「皮肉」の言を發した。自分を認めさせたい欲望から、彼は自ら描いた絵画を夫妻に見せもしたが、「味に傾」いた絵だと夫人に批評される。鼈四郎はなおもこの夫妻に「反撃」しようとし、夫人の味覚を「鑑識」するため「手料理の昼食」に招いた。

このあたりの描写から、〈京都〉に関連する箇所を引いておこう。

席は加茂川の堤下の知れる家元の茶室を借り受けたものであった。(中略) 鼈四郎は夫人が通客であつた場合を予想し、もしその眼で見られても恥しからぬやう、坂本の諸子川の諸子魚とか、鞍馬の山椒皮なども、逸早く取寄せて、食品中に備へた。(中略) 加茂川は、やや水嵩増して、ささ濁りの流勢は河原の上を八十岐に分れ下へ落ちて行く、蛇籠に阻まれる花芥あくたの渚の色取りは昔に变りはないけれども、魚は少くなつたかして、漁る子供の姿も見えない。堤の芽出し柳の煙れる梢に春なかばの空は晴れみ曇りみしてある。(中略) 鼈四郎は、笑ひに紛らしながら、幼時、母子二人の夕餉の菜のために、この河原で小魚を掬ひ帰つた話をした。

鼈四郎の懐かしむ情景としての加茂の流れ、調理場の「ご当地もの」の食材が饗される茶室など、古都の文化的な風趣が、引用した文章の筆致からよく伝わってくる。

鼈四郎には、「人の嗜慾に対し間牒犬のやうな嗅覚」が備わっていた。彼は料理を、夫人の「嗜求する虫の性質」にあわせて作り、「所詮、料理といふものは勞りなのであらうか」との思いにも耽りつつ、饗応を続けてゆく。夫妻は鼈四郎の料理の腕に感服し、夫人も「立派な芸術」だと褒めた。鼈四郎は絵画の折と同じく「凶星」と感じ、そのように認められたことで

「自分の生涯の止めを刺された気がした」。

さらに夫人は「まこと」が徹した料理だとの評価をし、鼈四郎の心を揺さ振る。のち「壬生狂言の見物」へと去った夫妻とは、それきり会うこともなくなったが、鼈四郎はこの「通り魔のやうな」経験の後、「まこと」を突き詰めるよりも「結局、安心立命するものを捉へさへしたら」いい、「せいぜい好きなことに殉じて行」こう、「いざとなれば死にさへすれば」よいと、あらためて自分の人生のスタンスにつき思いを巡らしていた。

このあと「親友」檜垣は、癌のため「天才の死」を準備して、苦しみのうちに世を去った。鼈四郎は檜垣が小康を得た際、彼の所望する贅沢な西洋料理を作っていた。檜垣は痛みにリズムをあわせ、唄も口ずさむ。彼はまた首の癌の瘤に「人面疽」らしき絵を描くよう鼈四郎に頼みもした。そうした苦悶に對抗する「悪戯ごころ」を、意地でも見せようとしながら檜垣は死んだのである。東京には亡友の菩提寺があつて、伯母も住んでいた。鼈四郎は遺骨を携えて京に家族を残したまま上京し、檜垣の伯母の家で暮らすようになる。

こうして鼈四郎の〈京都〉時代は終わった。北大路魯山人が親しんだと思われる、風流とモダンを嗜好した人々や当時の京の街が描出されているところは印象的だ。鼈四郎に深い芸術・

人生上の影響を与えて早世した檜垣や、かの子らしき芸術通の夫人との交わりといった出来事も、「食魔」での重要な場面であった。

「食魔」に〈京都〉が描かれるのは、鼈四郎のモデルとなった北大路魯山人が、そこで生まれ育った事実ゆえであろう。先に魯山人についての情報は、彼を知る岡本一平から供されたことと記したが、京都時代の若い魯山人とかの子が出会うことはあり得ないし、そもそもモデルの詮索はさして意味のないことである。だが、おそらくかの子は実際に〈京都〉に出向いて、「メーゾン檜垣」に似た京極の洋食店での歓迎会に招かれ、のち「壬生狂言」などを観たことで「食魔」を構想したのではないか。旅行が何時のことかは詳らかでないが、「食魔」における活き活きとした〈京都〉の描かれ方は、やはり作者の現地で的美食等の体験から生まれたことを推測させる。それに鼈四郎が当地で生まれ、料理など芸術をめぐる思量と技量を磨いたことは、上京後の彼の経歴や人間像にも奥行を加えたものと考えることができであろう。

#### 四、おわりに

岡本かの子は〈京都〉を幾度も訪れた。大正なら七年の六

月、十四年に訪ねていた可能性があり、昭和では「関西へ夏期の旅」を詠んだ四年夏、「晩秋の嵯峨野」で回想した九年十一月、「京の春雨」に記した十二年三月に観光をしていた。七年六月の大阪旅行の前後にも立寄ったかもしれない。いずれにせよ「京の春雨」発表の昭和十二年の時点で、計五度にわたる直接体験としての〈京都〉行をしていたようである。

その折々にかの子は、四条界限から銀閣寺、比叡山での歌を作ったり、春秋の嵐山や嵯峨野の風景から「新古典的美感」を感受するなどしていた。国内では比較的遠方であったにもかかわらず、訪問回数が多かった理由には、日本文化の集積地としての魅力の大きさが挙げられるだろう。古都としての歴史、同地において保持されてきた美の「伝統」に、かの子も強い牽引力を感じていたはずである。そうして、そもそも〈京都〉の美の維持には、人工性という補助線が不可欠であった。つまりかの子の感動していた嵯峨野や嵐山などの、いつまでも変らぬ自然の美観は、常に人により保全されてきた文化的な風景だったのである。

古都の文化的風景への感動は、かの子をして帰京後に、「鯉魚」など仏教的背景の色濃い小説や戯曲を書かしめた。あわせて、かねて古典の読書という間接的な〈京都〉体験を通じて同地に親しみ、憧憬の念を募らせて来たところからも、数多くの

随筆や小説類が生み出されたのである。

昭和三、四年に発表され、のち仏教文学集『散華抄』（大雄閣、昭四・五）にまとめられた「奇蹟」と「ある日の蓮月尼」、それから「晩秋の嵯峨野」に記述された昭和九年十一月の〈京都〉観光の後に書かれた、翌年発表の「茶屋知らず物語」「鯉魚」「上田秋成の晩年」「或る秋の紫式部」——これらは皆、愛欲など人間の迷妄をテーマとしているといつてよい。彼らの妄執の多くはある事件を介して浄化されていた。他者との関わりから浄化される妄念は仏教思想をバックボーンとするかの子文学によくみられる構想であるが、この経緯が〈京都〉を舞台として描かれたのは、仏教に所縁の深い同地にふさわしい設定であった。

これらは、平安から江戸期にかけての、古典を介した間接的体験により描かれた作だが、現代小説の「食魔」における〈京都〉の描写は、おそらくかの子自身の直接体験を機縁にしたものと思われる。北大路魯山人をモデルとした鼈四郎の人物像は自意識が強く、感受性の鋭い芸術家気質であったのだが、彼も妄念にとらわれ易い性格であった。そこに魂の浄化はもたらされないが、この主人公にとつての〈京都〉は彼を磨き育てた地、いわば精神故郷として在った。

以上のように、岡本かの子の文学における〈京都〉は、まず

文化性、とりわけ仏教的な空気が濃い場所と作者に解され、その上で、執着心を抱えた人物達が住み、時にそれが浄化されるドラマの舞台として設定されていた。かの子は旅行や読書を通して歴史・文化の集積地〈京都〉との直接・間接的な往還を繰り返してきた。この経験から得られた文学や仏教の素養から、かの子文学はその幅を確実に拡張得たのである。その成果となったのが短歌や随筆、また戯曲や「鯉魚」「食魔」等の小説であった。上述した作品群の描かれようからは、かの子文学に本質的な人間の執念と迷妄の諸相、そうしてそれらがしばしば際会する魂の浄化のドラマが、見出せるのである。

## 註

- (1) かの子の短歌や随筆は、年譜に記載されていない旅行の事実を伝える。たとえば随筆「桐の花盛り」(『国文学 解釈と鑑賞』昭十一・九)に北海道を旅したとあり、短歌「北海道追憶」(『キング』昭十一・九)二首には小樽、札幌が出て来る。青森への講演は「名流婦人のハガキ通信」(『女性の光』昭十・八)、盛岡は「旅のうた」(『短歌研究』昭十・八)により知られる。小説「みちのく」(『雄弁』昭十三・九)には昭和十二年に講演した仙台市や新潟県の柿崎町らしき講演先が舞台になっている。ほかに「小町の芍薬」(『むらさき』昭十一・四)の舞台は秋田県雄勝郡横堀近辺であった。
- 関東甲信越では、東海道・伊豆が「病める旅にて」(『水甕』

大六・七)や「伊豆山」(『短歌雑誌』大八・九)、千葉県市川の千町田から外房方面が「海に添ふ国」(『日光』昭二・十二)に歌われ、山梨地方が「山川草木」(『短歌研究』昭十三・一)の「甲斐路」に、長野県地域が短歌「信濃路」(『水甕』大六・九)、浅間山も「高原の峰」(『短歌研究』昭十三・十一)に詠まれていた。

岡本一平「解説風に」(『鮎』改造社、昭十六・三)には、かの子が静岡に二度講演に行き、宇津谷峠から島田までを旅し、愛知県蒲郡温泉の常磐館によく宿泊して、鈴鹿でも一度講演をして、峠を徒歩で越えたと記されている。

このほか、短歌「海南荘の客となりて」(『アサヒグラフ』昭二・四・十三)によって、兵庫県六甲の川田順宅に来ていたこと、初出未詳ながら短歌「相聞」(『榛名山詠草』(『新選岡本かの子集』新潮文庫、昭十五・六)から奈良県、群馬県にも来ていたことが知られる。随筆「思ひ出の町」(『婦人公論』昭十二・六)によると、松江には二度行っていたようである。

「旅とガストロノム」(『日本国民』昭七・六)には松江のほか、大阪、神戸、明石と淡路島、岡山、鞆、尾道、広島への旅が記述。遺漏もあろうが、講演旅行を含め、その足跡はほぼ全国にわたったとみられる。

- (2) ほかに大正十年五月の、一平と東京漫画会同人との東海道五十三次旅行に、かの子が一時的にせよ参加していた可能性はある。

- (3) 「岡本かの子『東海道五十三次』試論」(『国文学論叢』四二輯、平九・二・一)四五頁。

- (4) 「かの子の秋成」(堀切実編『近世文学研究の新展開——俳諧と小説』ベリかん社、平十六・二・二十)五四一頁。嶋田はか

の子が大正七年刊の国書刊行会版『上田秋成全集』、同書の岩橋小弥太「小伝」を参照し執筆したとする。

- (5) 「解説風」に『鮎』改造社、昭十六・三・十四 三一六～三二七頁。

- (6) 「岡本かの子『食魔』について」『日本文学』三〇巻六号、昭五十六・六・十 三五～四三頁。なお勝又は荒木蛍雪とお絹が藤井利八と藤井せき、檜垣が「京都の怪人物」内貴清兵衛をモデルとしているのではないかと述べていた。

- (7) 直接〈京都〉の出てこない現代小説はある。短篇「東海道五十三次」『新日本』昭十三・八) には、東海道を往来しながら暮らす作楽井が憧憬しながら訪れることのない場所として描かれる。長篇「丸の内草話」『日本評論』昭十三・十二、昭十四・一、四) では、〈京都〉が主人公の息子の転勤先になったと述べられている。

追記 拙稿は、「佛教大学総合研究所 共同研究班 研究成果発表会」(平十九・二・二十二 於佛教大学)での発表(題目「〈京都〉と近代文学——室生犀星・井上立士・伊藤茂次、そして岡本かの子——」)における報告用原稿のうち、岡本かの子について新たにまとめたものである。席上ご意見をいただいた諸氏にあらためて深謝を申し述べたい。なお作品の引用は冬樹社版全集によった。

(トノムラ アキラ 嘱託研究員)